福岡教育大学紀要，第73号，第１分冊，1−7（2024）

国語教科書における古典を学ぶ意義に関する記述の検討
―高等学校「言語文化」教科書を中心に―

An Examination of the Descriptions of the Significance of Studying Classics in Japanese Language Textbooks
― Focusing on the high school “Language and Culture” textbooks ―

河　野　智　文

Tomofumi KAWANO
国語教育研究ユニット

（令和５年９月29日受付，令和５年12月22日受理）

1　はじめに

「言語文化」は，平成 30 年 3 月 30 日に公示された高等学校学習指導要領において，「現代の国語」とともに，国語科の共通必履修科目として新設されたものである。『高等学校学習指導要領解説国語編』（平成 30 年 7 月）では，「主として『古典の学習について，日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く，学習意欲が高まらない』という課題を踏まえ，特にこうした課題が，古典を含む我が国の言語文化への理解と関係が深いことを考慮し，上代から近現代に受け継がれてきた我が国の言語文化への理解を深める科目として，その目標及び内容の整合を図った（10 ページ）」と説明されている。

学習者は，小学校・中学校でも古典（伝統的な言語文化）にふれてきているところではあるが，高等学校で最初に古典を学ぶ科目が「言語文化」である。そこではあらためて，学習の意義について説明する必要が生じるだろう。しかしこれは，容易なことではない。

本稿では，「言語文化」の教科書（一覧は後掲）が，その冒頭においておこなっている，古典を学ぶ意義についての説明を概観し，特徴を考察する。

なお，本稿では，古文と漢文とをあわせて指す場合に「古典」を，それぞれを指す場合は「古文」「漢文」を用いている。

2　古文を学ぶ意義

「言語文化」の教科書は，9 社から 17 点が発行されている。もっとも正面から「古文を学ぶ意義」を説明しているのが，文英堂（710）である。それは，以下のようなものである。

> そんな昔の日本語で書かれた古文を現代の日本でどうして学ばなければならないのでしょうか。古文の世界および古文を学ぶ意味はいったいどこにあるのでしょうか。
>
> （26 ページ）

> 古典を持つ日本に住むわたしたちの考えや言葉はおのずと古文の世界とつながっているからです。「やさしい」「こわい」「おもしろい」といったわたしたちが普段に使っているなにげない言葉も長い歴

史をもち，歴史を経過するうちに意味を変容させながら我々現代人に流れ込んでいるのです。わたしたちの根源を支えるものとして，古文は今も存在しているのです。

古文を学ぶことを通して，昔の人たちの考え方・感性を知り，そこから，現代人との類似点や相違点を見出し，ことばを通して日本の文化を歴史的かつ総合的に理解していけば，古文は現代人であるわたしたちの立ち位置を示してくれる道しるべになるのです。

古文の世界はそのまま現代につながっているのです。

（27 ページ）

同様の問題設定は，三省堂（703）にもみられる。

「なぜ古文を学ぶのか？」

古語を覚えるため……，古典文法を理解するため……。

そうではない。古語や古典文法の知識は，古文を読むための道具である。それらはあくまで手段として必要なのであり，それ自体が学びの目的ではない。

時代を越えて生き続けてきた古文の世界に触れることで，私たちは古人の心を知ることができる。それぞれの時代を背景に，現代の私たちとは異なるものの見方や生活がそこにはある。また，昔も今も，そしておそらくはこれからも変わることのない喜びや悲しみ，苦悩や価値観がそこにはある。古人と向き合うことで今の，そして将来の自分を見つめることができるのだ。数知れぬ先人たちが古文の世界に触れ，それぞれの思いを積み重ねてきた。その世界に何を見つけ出すのか，それはここの読み手にゆだねられている。どんな出会いが待っているか。古文を読むことの大きな魅力はそこにある。

今日の中には昨日が息づいている。そして今日は明日を導く時間となる。古文の中には古人の言葉が，その思いが脈打っている。そして私たちの言葉は未来へと受け継がれていく。私たち一人一人が自ずと言語文化の担い手であることを，古文の世界に分け入ることで実感できるだろう。

言語文化として主に文字の形で享受されてきた古文の世界は，たとえば絵画として（絵巻物や挿絵など），舞台芸能として（歌舞伎や文楽など），遊びとして（百人一首カルタなど），多様な形と繋がりながら，文化全般にわたって広がっている。また，散る桜に美しさとともにはかなさを感じ，中秋の名月に目を奪われる古人の感性は，現代を生きる私たちにも受け継がれている。文化は，形態や時間の枠を越えて共有されていく。

鎌倉時代，今から七百年ほど前になるが，兼好法師は次のように書き記している。

ひとり灯の下にて文をひろげて，見ぬ世の人を友とする，こよなう慰むわざなり。（徒然草）

古文の世界の扉を開くことで，一人でも多くの「友」と出会い，その声に耳を傾けてみよう。そして，古人との対話を通して，自分の中にあるさまざまな思いと向き合ってみよう。

（24-25 ページ）

下線を付した順に要素を挙げると，「異質性」，「共通性」，「主体的創造性（単なる享受ではなく）」，「自己省察」といえよう。

現代との異質性および共通性については，他の教科書では，次のように説明されている。

古典が時代を超えて受け継がれたのは，人間の抱える普遍的な問題と深く関わっているからだろう。私たちは，古典を読むことによって，「いま」を生きる知恵をも手に入れることができる。

（東京書籍 701，118 ページ）

古典学習によって，伝統的な言語文化を享受・理解するだけではなく，学習者（生徒）が，その継承や創造を担う者であることの説明は，第一学習社（713）にもみられる。（注 1）

現代に生きる私たち一人一人が古典の継承者であると気づくことが，古典に近づくきっかけとなるだろう。

これから学ぶ古典には，それらが書かれた時代特有の感じ方や考え方，生活の姿が描かれている。現代とは異なる価値観や社会制度に驚くこともあるかもしれない。だが，さらに読み深めていけば，人の心情や思索などには時代を超えても変わらないものがあることに気づくはずである。その経験は，私たちのものの見方や考え方を養うことにつながり，自分自身を見つめ直す手がかりともなるだろう。そして，私たちが長い歴史を受け継ぐ存在であることを実感できるにちがいない。

古典の文章（古文）と現代文を比べると，仮名遣いや用いられる語，文法などに違いがある。難しく感じるかもしれないが，言葉は，先人たちの英知や営み，文化を今に伝えてくれるものである。また，古文独特の調子や美しい表現そのものが，すでに一つの文化でもある。過去から現代へと文化を伝え，つないできた言葉について学ぶことは，これからの未来に向けて豊かな言語文化を構築していくためにも大切なことである。

（10-11 ページ）

自己省察の観点は，桐原書店（717）にもみられる。

わたしたちの知らないところで，わたしたちの血や肉となっている古典文学に，じかに原文で接することができることは，大きな喜びとなるはずです。古典を学ぶことは，日本文化や日本の成り立ちを知ることであり，それは，わたしたち自身を知ることにもつながるのです。

（9 ページ）

ここで挙げた観点は，選択科目「古典探究」の学習指導要領解説にある，「古典などを読むことで，先人が何を感じて何を考えたのか，いかに生きたのかということを知ることができる。古典に表れている，人間，社会，自然などに対する，ものの見方，感じ方，考え方には，現代と共通するものや，現代とは異なる古文特有，あるいは漢文特有のものもある。古典の学習を通して古典の豊かな世界に触れるとともに，古典についての解説や評論なども必要に応じて参考にしながら，それらの様々なものの見方，感じ方，考え方に，主体的に関わることを通して，思考力や想像力を伸ばし，豊かな感性や情緒をはぐくむことで，社会人としての資質の形成に資することをねらいとしている。このような力を育成して，生徒が自分の思いや考えを広げたり深めたりすることを目指している（248 ページ）」にも深く関わっている。

3　漢文を学ぶ意義

「なぜ漢文を学ぶのか」という問いを立てて説明しているのが，明治書院（711）である。

漢文を中国以外の地域の言語で読むために，各地域で独自の方法が生まれました。特に日本では，漢文を日本語の文章として読む訓読の方法が広く行われるようになりました。私たちの祖先はこの訓読によって，漢文の持つ簡潔さ，論理性，表現力などを日本語に取り入れ，ことばを豊かにしてきました。<u>現代の私たちが日本の文学や文化の根源を見直し，現在の日常の言葉を深く理解するためには，漢文を学ぶことがどうしても必要なのです。</u>

漢文はわが国の言葉と文化の源の一つです。そしてそれはもともと，中国や朝鮮半島の人々と共有してきたものです。私たち日本人は，自らの言葉と心の中に，広い世界の人々と共にしてきた源泉を持っているのです。漢文を学び，その広い世界につながる扉を開きましょう。

（116 ページ）

日本文化との関わりの観点からの説明は，文英堂（710）にもみられる。

「身のまわりにある漢文」

このように漢文で書かれた故事を知ることで故事成語を正しく使うことができるようになり，漢文の

構造を学ぶことで日本語の単語の仕組みもさらに理解できるようになると思います。そして新しい事物を表現する時に漢文からの転用が可能であったのは，それほど日本人が漢文に親しんでいたからで，日本の言語文化に漢文が大きく関わっていることを示しています。漢文の学習は海外の文化を学ぶとともに，日本語と日本の文化をより深く学ぶことでもあるのです。

（191 ページ）

このことも，選択科目「古典探究」の指導事項「古典などを読むことを通して，我が国の文化の特質や，我が国の文化と中国など外国の文化との関係について理解を深めること」につながる。（注 2）

4 「訓読」の観点

先に引用した明治書院（711）にあったように，漢文学習の導入にあたって，日本人が漢文を受容する際の訓読を取りあげる説明も複数ある。

私たちの祖先は，漢字・漢文が伝来するまで文字を持っていなかった。しかし，中国から漢字がもたらされると，それに日本語を当てはめて読むことや，漢字をもとに平仮名，片仮名を作り出して日本語を表現することを工夫し始めた。また，もとの文章の形のままで日本語を当てはめて訳読する訓読という優れた方法を考案し，この漢文訓読を主要な手段として，中国文化の受容に努めてきたのである。

漢文が我が国の言語文化を形成発展させる上で果たしたのは，単に受動的に中国の文化を学ぶための道具としての役割だけではない。中国の文章に倣って漢文で表現することが日本人の文章表現の基本となったのである。歴史書や律令などの公的文書はもちろんのこと，旅行記や日記のような個人的な文章も漢文で書かれ，その伝統は明治まで続いた。漢文は，その利用なくしては自己表現までも不可能なほど，我が国の言語文化の根幹を成すものとなったのである。

漢文とは，古くから我が国にもたらされてきた中国の古典と，それに倣って日本人によって作成された詩文の総称である。言語，文学，思想など，我が国の言語文化は確実に漢文によってはぐくまれてきたと言えよう。漢文は，もともとは中国の古典であっても，同時にまた日本人にとっての古典なのである。私たちがいま漢文を学ぶ理由はここにある。

我が国の言語文化を培ってきた漢文の世界に触れ，各自の言語感覚を豊かにするとともに，ものの見方や考え方を深めていこう。

（大修館 705，234-235 ページ）

こうした工夫（訓読のこと…引用者）により，漢文は日本の古典の一つとしても広く読み伝えられ，数多くの言葉が日本語の中に取り入れられてきた。それと同時に，中国の古典に表されたものの見方や考え方は，日本人の精神形成や日本文化の発展にも大きな影響を与えている。漢字・漢文は日本の言語文化の原点であり，中国の古典は，先人の知恵を学ぶ宝庫なのである。

（第一学習社 713，149 ページ）

「訓読」は，漢文読解の技能としての必要性から，漢文学習の冒頭に置かれているが，同時に，中国文化受容の具体的な方法でもあり，日本文化と中国文化の密接な関わりを述べ，漢文学習の必要性を説明するものにもなっている。

5 古典を学ぶ意義を説明するということ

石井英真（2020）は，「学問の系統を教育の系統に再構成していく前提として，各教科を学ぶ意味，教科の本質を自分なりの言葉で具体化しておくことは重要です。新年度の最初の授業（授業開き）のときに，その教科を学ぶ意味を子どもたちにどう語るかを考えてみるとよいでしょう」，「授業開きでその教師の授業のコンセプトを示し，その教師との一年間の授業でどんな学びが展開されそうかという，イメージや予感を形成する。そうした教師の「ねがい」（教科観・学習観）をしめしても，それはスローガンに終わるかもしれ

ません。しかし，その後の授業でそうした教科観や学習観が実際に尊重されたとき，子どもたちの教科観や学習観も組み替わっていくのです」（87-89 ページ）と述べている。

しかしながら，古典を学ぶ意味を学習者が納得するように具体的に語ることは容易ではない。鹿毛雅治（2013）をふまえると，古典を学ぶことの価値は，「文化関連価値」に見出されると考えられる。これを納得させることは，「興味関連価値」や「実用関連価値」に比べると容易ではない。（注 3）

この点については，内田樹（2007）の「教育の逆説は，教育から受益する人間は，自分がどのような利益を得ているのかを，教育がある程度進行するまで，場合によっては教育過程（ママ）が終了するまで，言うことができないということにあります（46 ページ・傍点は原文ママ）」をふまえ，高等学校での古典学習を開始する前の段階で，その意義を説明することには無理があると考えることもできよう。

「言語文化」教科書には，すでに古典学習を終え，その意義を感得した人の文章を冒頭に置いているものもある。三省堂（704）は，小川洋子「千年の時が与えてくれる安堵」を置いている。その一部は次のようなものである。

> 人間は，千年前の人と同じ悩みで苦しんでいるんだなあ，と思う。社会の仕組みも生活環境もこんなに変わったのに，心の中は大して変わっていない。そう考えるとなぜか心が安らぐ。自分が今抱えている問題は，自分一人が背負っているのではない。人間が誕生して以来，ずっと変わらず，繰り返し繰り返し悩み抜かれている問題なのだ。自分は孤立した一個の点ではなく，延々と続く長い川の一部にすぎない。だからだいじょうぶなんだと，どこからともなく元気がわいてくる。
>
> 高校生の頃は，古典の時間に『枕草子』を読んでも楽しくなかった。真の魅力に気づくまで三十年もかかってしまった。しかし相手は千年を生き抜いてきた本だ。慌てることはない。これからもゆっくり読み返してゆこう。
>
> （16 ページ）

ここでの「高校生の頃は」「楽しくなかった」という記述は，学習者への説得的メッセージの役割を担っているといえよう。同様の記述は，筑摩書房（712）の，大岡信「言葉の力」にもみられ，この「何度も繰り返して徐々に深入りしてゆくほかないのが古典というものなのである」という記述の方が，より直接的である。

> 往々にして人は古典の中に性急に何らかの結晶化した智恵や教訓を求めにゆく傾向があって，現実にはそんなものは滅多にないから，失望する結果になる。古典を読むためには，むしろことさらに時間が必要だし，その作品の生まれ出た時代環境に関する知識も必要で，つまり何度も繰り返して徐々に深入りしてゆくほかないのが古典というものなのである。
>
> それというのも，古典として多くの人々に長い歳月仰がれてきた書物は，決してどぎつく人目を惹くような名文句に満ちているわけではなく，むしろそこで使われている言葉は，あたりまえの言葉が多いのである。ふだん使わないような珍しい言葉をふんだんに使って書かれた千古不滅の傑作などというものは，まず全くないといっていい。傑作というのもののすばらしさは，一語一語とってみるとじつに普通の言葉で書かれている点にあるとさえいえるだろう。これは傑作だから読んでみなさい，と推賞されて読んでみたが一向につまらなかった，というようなことが生じるのも，一見退屈で平凡な古典というものの通性だからである。そのとき自分の心がそれに対して素直に入っていけないようなときは，そこに書かれていることは全くありふれたこととしか思われない。そういうものが古典というものであるらしい。
>
> （11-12 ページ）

おわりに

古典を学ぶ意義を，これから学習する（つまり未習の）学習者が納得するように伝えることは容易ではない。しかし，高等学校国語科における最初の古典学習を担う「言語文化」教科書は，それぞれにそのことへ取り組んでいる。本稿は教科書の概観の域を出ないが，今後，学習者の受けとめ（教科書のはたらきかけの

効果），学ぶ意義の説明内容と方法のあり方について，考察を継続したい。

「言語文化」教科書一覧

・検定は令和３年３月５日。

2	東書	言文 701『新編言語文化』東京書籍，令和４年２月 10 日発行。
2	東書	言文 702『精選言語文化』東京書籍，令和４年２月 10 日発行。
15	三省堂	言文 703『精選言語文化』三省堂，令和４年３月 30 日発行。
15	三省堂	言文 704『新言語文化』三省堂，令和４年３月 30 日発行。
50	大修館	言文 705『言語文化』大修館，令和４年４月１日発行。
50	大修館	言文 706『新編言語文化』大修館，令和４年４月１日発行。
104	数研	言文 707『言語文化』数研出版，令和４年１月 31 日発行。
104	数研	言文 708『高等学校言語文化』数研出版，令和４年１月 31 日発行。
104	数研	言文 709『新編言語文化』数研出版，令和４年１月 31 日発行。
109	文英堂	言文 710『言語文化』文英堂，令和４年４月１日発行。
117	明治	言文 711『精選言語文化』明治書院，令和４年１月 20 日発行。
143	筑摩	言文 712『言語文化』筑摩書房，令和４年１月 20 日発行。
183	第一	言文 713『高等学校言語文化』第一学習社，令和４年２月 10 日発行。
183	第一	言文 714『高等学校精選言語文化』第一学習社，令和４年２月 10 日発行。
183	第一	言文 715『高等学校標準言語文化』第一学習社，令和４年２月 10 日発行。
183	第一	言文 716『高等学校新編言語文化』第一学習社，令和４年２月 10 日発行。
212	桐原	言文 717『探求言語文化』桐原書店，令和４年２月 25 日発行。

注

(1) 第一学習社は，713 から 716 まで，共通の説明を用いている。

(2)「我が国の文化と外国の文化との関係を取り上げているのは，我が国の言語文化の特質を理解するに当たって，中国など外国の文化との関係が重要だからである。我が国は中国の文化の受容と変容を繰り返しつつ独自の文化を築き上げてきた。その経緯を踏まえ，古文と漢文の両方を学ぶことを通して，両文化の関係に気付くことが大切である。古来，我が国は，文字，書物を媒介にして，多くのものを中国から学んだ。その結果，漢語や漢文訓読の文体が，現代においても国語による文章表現の骨格の一つとなっている。漢文を古典として学ぶことの理由はこの点にもある。」（『高等学校学習指導要領解説国語編』119 ページ）

(3) 市川伸一（1995）の「学習動機の２要因モデル」（21 ページ）では，「充実志向（学習自体がおもしろい）」にあたると考えられる。渡辺春美（2016）は，「古典学習指導の意義」を，「(1)内容的意義，(2)言語的意義，(3)教養的意義，(4)情意的意義」に整理している。菊野雅之（2022）は「戦後に積み重ねられてきた様々な古典教育論もまた改めて学習者と古典の関係性という観点から読み直す必要があろう（143 ページ）」として，先行研究を列挙し，「古典を読むことの機能，学習者にとっての学ぶ価値とは何かということを一つ一つの教材，単元に丁寧に位置付けるあるいは掘り起こす，更新する営みを続ける際の教育目標，教材研究，教材発掘，単元構想等の観点あるいは方法論として，フラットなレベルで活用する発想が必要となるであろう（143-144 ページ）」と述べている。極めて重要な指摘であるが，別稿の課題としたい。

文献

『高等学校用教科書目録（令和 4 年度使用）』文部科学省，令和 3 年 4 月。
『高等学校学習指導要領解説国語編』文部科学省，平成 30 年（2018 年）7 月。
石井英真（2020）『授業づくりの深め方―「よい授業」をデザインするための 5 つのツボ―』ミネルヴァ書房，2020 年。
鹿毛雅治（2013）『学習意欲の理論―動機づけの教育心理学』金子書房，2013 年。
内田 樹（2007）『下流志向　学ばない子どもたち，働かない若者たち』講談社，2007 年。
市川伸一（1995）『学習と教育の心理学』岩波書店，1995 年。
渡辺春美（2016）『古典教育の創造―授業の活性化を求めて―』渓水社，2016 年。
菊野雅之『古典教育をオーバーホールする―国語教育史研究と教材研究の視点から』文学通信，2022 年。

・引用文中の下線は引用者による。
・引用にあたって，読みやすいようにレイアウト等を改変したところがある。